

---

# 魔法少女と黄昏の守護者

Acta est Fabula

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女と黄昏の守護者

### 【Nコード】

N9829Y

### 【作者名】

Acta est Fabula

### 【あらすじ】

時代は流れ、時も流れる。黄昏の守護者は次代を担うものたちに意志を託しこの世から消滅した。だが彼の舞台はまだ終わらない。これから始まるのは黄昏の守護者の刹那の物語。タイトル変えませんでした。

## プロローグ（前書き）

すみません、半年以上ぶりです。性懲りも無く三作目、こんな書  
くくらしいなら続きかけと言ってくるかもしれないが・・・本当に  
すみません一作目と二作目の書いていた話が五月くらいにパソコン  
が壊れたことによりすべてのデータが消えました。

そして今月まで仕事の都合により書くことが出来ませんでした。な  
ので申し訳ないと思いますが、一作目と二作目を削除してこの話ひ  
とつでやっていこうと思います。

未知なる結末と東方殺人伝を楽しみにしていた読者にお詫びします。

## プロローグ

「……くっくく……」

男はこれから起きるであろうつことに思いをはせ笑っていた。自分たちの後をついで行く者たちが現れてくれたこと、自分が倒された後に起こるであろう次代を担うものたちの戦い、そして……

「……滑稽だな第六天」

自分たちが……

「貴様は負ける!!」

勝利したことに。

「俺たちの勝ちだああ!!」

男は漂っていた暗い空間を、体は少しずつ粒子となって消えていく。だがそれに恐怖は無かった。次代を担うものが現れ自分たちの意思を継ぎ、自分たちに勝利したから。

「これで俺の役目も終わりか……。」

男は空間に身を任せ呟いた。

「……君が居なくなってから長い時が過ぎてしまったよ。」

「……なあ聞いてくれ、やっと俺たちの意思をついでくれるやつらがあらわれたんだ。あいつらがきつと俺たちが守ってきた黄昏よりもいい世界にしてくれるはずだから。」

「きつと俺だけじゃ駄目だったろうな……あいつらが居たから俺はここまでやることができたんだ」

男は自嘲ぎみに笑いながら答えた。

「司郎、戒、櫻井、ベアトリス、リザさん、アンナ、ミハエル……そして先輩……。」

「戒も櫻井も真面目すぎてさあ、あいつらを殺したって言ったとき若干焦ってたんだ俺。しかもその後の戦いも殺す勢いで戦ってたし。リザさんとアンナはなにもなくて傍観してるのが多かったようなきがする。先輩にいたっては俺に座を取れって言うてくるし……。」

「ミハエルはミハエルでどこかに引きこもってるし、司郎にいたってはそれが必要だったのは分かるけど・・・場を引っ掻き回しすぎだろうが！！あれ絶対自分が楽しんでたろうが！！」

男は声を張り上げる、頭の中に悪友を思い浮かべたら馬鹿笑いしてた。・・・ムカつく。

「・・・でも本当にあいつらに感謝してるし誇りに思ってるんだ・・・」

男は仲間達の顔を一人づつ思い浮かべていた。消して忘れないように、自分の魂に刻むように。

「もし・・・」

「もし次があるのならまたみんなで・・・」

あの消えていった黄昏の刹那を味わおう・・・

「うん、そうだね」

「・・・っ！！」

男はそれが幻聴だとわかっていた。自分たちが守っていた黄昏の女神はもう居ない、今の座に座るやつに殺されたから・・・でも・・・

「・・・ああ、そうだね。」

男にはその声が幻聴ではなく自分の最後に彼女が答えてくれた最後の言葉だとそう信じることにした。

だから最後に男は彼女に最後にある言葉を伝えた・・・

「時よ止まれ・・・君は美しいから・・・」

そうつぶやくと男は粒子となってこの暗闇の空間から消えていった。

こうして夜都賀波岐首領、天魔・夜刀は次代の者たちに意思を託しこの舞台から退場していった・・・

だが、彼の物語はまだ終わっていないかった・・・

今から始まる物語は彼の話・・・

さあ、今から刹那の物語を始めよう・・・

この物語に脚本家はいない・・・

すべては、この物語に参加する役者しだい・・・



## プロローグ（後書き）

はい、主人公は蓮炭です。神咒神威神楽ではこいつが主人公だろと思っただのかっこよさでした。

## 異世界転移（前書き）

グダグダな駄文を投稿。俺、文才無いのかなと思う今日この頃。  
他の作者さんすごいですね。

## 異世界転移

目を覚ますと青い空と太陽が見えた。

「うつ・・・ここは？」

上半身を起き上がらせあたりを見渡す。広場のような場所です。そこには遊具らしきものがあり俺はその中心のベンチに仰向けになって寝ていたらしい。

「俺は、・・・いったい・・・」

俺は死んだはずだと思った。いや、現に倒されたことも覚えている。俺の首にあいつの一撃が通ったことも。そう、致命傷だった。

俺はもう一度周りを見渡す。さっきは気づかなかったが所々に十歳にも届かないであろう子供たちが遊具で遊んだり、ボールを蹴りながらそれを追いかけていたりしていた。

おかしい。何がおかしいと言えば今自分が居る場所そして状況がおかしかった。

「公園・・・だよな？ここ。」

そう、他人が見ればすぐにわかる事だが自分にはこの場所が信じられなかった。

あの世界には公園が出来るような文明開化はしていなかったからだ。俺たちが守っていたあの町には公園があった。だがその町の公園は所々が破壊されておりここと比べると天と地ほどの差があった。そ

して公園で遊んでいる子供達。子供達の服装はあの世界の服と比べるとかなり違っていた。そうまるで俺達が暮らしていた世界。あの黄昏にいたときの人々の服装とにていた。そして自分の服装、いつの間にか着ていた服は色が青の長袖の中に白いポロシャツ下がジーンズと言っ服装だった。

何故自分が服を着ていたのか覚えていないが。俺はこの世界が自分がいた世界じゃないと言っ事に気がついた。

「異世界なのか・・・」

俺はベンチから立ち上がると近くにあったトイレに入っっていった。頭が回らない、なぜ自分が異世界にいるのか、なぜ、自分は死んでいないのか、なぜ、なぜ、なぜ、考えるだけで疑問が湧き水のように湧き上がってくる。俺は気分を落ち着かせようとトイレの手洗いで顔を洗おうとした。

「な・・・」

そこでもう一つのことを気がついた。

鏡に写る青年、そこには18歳位で肌の色が肌色、そして髪の色が青、そして目の色も青になっている自分が写っていた。

何故？何故俺は、あのときの姿に戻っている。第六天との覇道の闘ぎ合いで俺は、髪も体もそして目も変色していたのに。

「何がどうなってんだ……。」

考えがまとまらない頭にイライラしながら俺はその場所から離れた。

時間が経つにつれて冷静になってきた俺は、公園から離れ町の中を探索することにした。

看板からこの町の名前が海鳴市と言う名前だと言うことが分かった俺は道行く人に聞きながら図書館があるところに移動していた。

「でけえ……。」

三十分もしないうちに到着した俺はその図書館の大きさに驚いていた。あの町にも図書館はあったがここまで大きくなかったからだ。これなら俺の知りたいことが調べられると思いい図書館の中に入っていた。

案の定図書館の中は広く、本棚が所狭しと並んでいた。

俺は歴史書がある本棚を探すために棚を散策し始めた。探し始めて5分くらいして目的の棚を見つけた俺はおもむろにそこから一冊手に取った。この世界がどう言う歴史を辿ってきたのか俺には興味があった。どういった渴望でこの世界が出来たのかも分からないが、この世界の歴史を見れば少しくらいはわかるだろうと思っていたからだ。・・・だが、

「俺がいた世界と同じ歴史を辿っているか・・・。」

本を読んで見たところ、ここは俺の世界と同じもしくは若干異なる歴史を辿ってきた世界だということが分かった。

(まさかとは思つが、永劫回帰じゃないだろうな)

俺は苦虫をかんだような顔をしてため息を吐き本を棚に直した。そんなことはありえないと分かっているが、あいつなら何か生きてそうだなと思う自分が嫌になった。そして用も済んだしここから離れようとして気づいた。少し離れたところに車椅子に乗った女の子が本棚から本を取ろうとして悪戦苦闘をしていることに。

俺は、その女の子に近づいていくと女の子が取ろうとした本を変わりに取りそれを手渡した。

「ほら、コレが取りたかつたんだろ？」

「あつ、ありがとうございます。」

女の子はいきなり現れた俺に驚いていたが、すぐにお礼を言ってきた。

「お前、車椅子に乗っているのに無茶するんだな。」

「いやあ、このくらいの高さなら取れるかなって思ってたんですけど。」

アハハと笑う女の子にあきれつつも俺はそこから離れようとしたが。

「ちょっと待ってください!！」

すぐに女の子に呼び止められた。

「なんだ？」

「あの、もう3冊くらい取って貰いたんですけど・・・」

振り向くと女の子が気まずそうにお願いしてきた。

俺は一度ため息を吐くと女の子のところに戻って行った。

「ほんとにありがとうございました」

「きにするな、これからあんな危ないことをしなければ俺も気にしない。」

「うぐっ……」

自分が危険なことをしていたのに自覚があったのだろう。女の子は胸を押さえた。

「お前も今度から本を取るときは近くの人に頼めよ」

「……」

「?……どうした。」

女の子がいきなり顔をムスツとしてこっちを見てきた。明らかに何かいいたげな顔だった。

「名前……」

「名前？」



「さつきからお兄さん私のことお前としか言っていないやん。私には八神はやてつて言う立派な名前があるねん!!」

「……ああ、そういうことか」

そこでやっと気がついた。確かに俺はこの女の子に対して名前で呼んではいけない。なにか言うときはお前としか言っていなかったこと。だがそれは名前を聞いていなかったのだからしょうがないだろうという気持ちもあった。

「それで?」

「え?」

「え?やないよ。私の名前を教えたんやからお兄さんの名前も教えてもらわな。」

俺はその言葉に少し考え自分の名前を口にした。

「……蓮」

「蓮?」

「ああ。」

「俺の名前は藤井蓮って言うんだ。」

## 異世界転移（後書き）

今日のお話

1 異世界に行く

2 図書館に行く

3 幼女に出会う

の三本でした。

感想もしくはここはここはこうすねばいいという所があればどこどこ送ってください。

## 異世界転移（裏）（前書き）

勢いとテンションがこの小説のエンジン。グダグダ感がガソリンです。

異世界転移（裏）ただ視点が違うだけのお話です。戦闘？何それおいしいの状態  
何時になったら戦闘が書けるのか。

そしてこの小説での設定無視を発表。

1、形成を見ても魂破壊はおこらない、威圧感が半端じゃないだけです。

正直魂破壊とか何その無理ゲー。その設定を生かしたまま書ける自信がありません

2、流出段階の蓮が座に居る存在を認識できない。

座を認識することは出来ませんがそこにいる存在と渴望を認識できません。（このリリカルワールドだけ他の世界なら分かる）

このことについては話が行くにつれて徐々にわかってきますのでおまちください。  
け、けして設定がめんどくさいとかそう言うのじゃありませんから！！

設定無視は今ほコレだけです。この設定を無視すんなという人は戻るをお願いします。

## 異世界転移（裏）

私は今でも覚えている。彼との最初の出会いを。

彼は一人ぼっちの私に優しさと家族の暖かさをくれた。

私が誰にも言えずに心の中で助けを求めていたときも、彼はそれを理解し助けにきてくれた。

私達ではどうにもならない相手に彼は立ち向かっていく。自分を犠牲にしながらも、それでも戦ってきた。

彼は強い、彼は強い、彼は強い。

そんな彼が私には、まるでお話に出てくる英雄ヒーローのような存在に思えた。

彼はよく私にこんな話をしていました。

「人の生きていられる時間はかぎりなく少ない、過ぎていく時間も取り戻すことはできない。だからこそ、今を大切にしなければいけない」

彼はその今と言う日常を「刹那」と言っていました。

小さいころの私はその言葉の意味をちゃんと理解することが出来なかった。

・・・だからなのでしょうか？

私は、彼の悲しみに気づいてあげること出来なかった

私に向ける笑顔の裏で彼はいつも泣いていたのかもしれないのに・・・

今でも考えてしまう

もし、私が彼の悲しみに気づいてあげることが出来ていたのなら彼は、

あんな事もせずにも今も私達と一緒にいてくれたのかもしれない・・・

side Hayate Yagami

その日の朝、私は気分が高揚していた。眠りからの目覚めもよく朝食に目玉焼きを作ろうと卵を割ったら黄身が二つ入ってたりテレビの星座占いでも一位を取っていたから。

「今日は何か良いことがありそうやな」

テレビの占いでも運命の出会いありと言っていたし。

朝食を終え、食器を洗い、洗濯物を干す。それが私の朝の日課。車椅子に乗っていると普通なら簡単な作業も私にとっては一つ一つが難しい作業になる。

足が動かなくなったのはいつからだろうか？私は、覚えていない。気がついたら足が動かない生活が私の日常になっていた。

時々考えてしまう。もし私の足が自由に動き普通の生活が出来るようになったのなら、他の同い年の子と一緒に学校に行ったり友達を作り、その友達と遊んだり出来たのかな？つと。

「あかんな、一人やとやっぱり考え事が多くなんねんな・・・」

でも、それはIFの話今の私にはありえない話であり関係ないこと。

朝の日課を終わらせた私は図書館に本を読みに行く為に服を着替える。昼になるとやる事のなくなる私はいつもそこで夕方まで時間をつぶす。何より自分は本を読むのが好きで別にコレに飽きる事が無かった。ただ、

「毎回思っんやけど図書館までの距離がちょっとなあ」

家から出た私は戸締りをして目的地に移動していく。

いくら家から図書館までの距離がそう無いとは言え、毎日車椅子を使い図書館を往復するのだ。もちろん車椅子を押してくれる人も居るわけが無いので自分の手で車椅子を動かして図書館に行くのは明白。

23

もしかしたら、近いうちに両腕の筋肉がとんでもないことになるんじゃないやろか？と自分の右腕を見るために袖を腕までまくり腕を見ながら頭の中で自分がどんな風になるかイメージしてみた。最初に自分の姿をイメージして、次に段々腕に筋肉を……

「……きもっ!」

自分のイメージした「八神はやて未来予想図(仮)」をあわてて消去する。さすがにこのイメージは無いと思ひ私はさっきまで考えていたおぞましいイメージをなるべく思い出さないようにそうそうに図書館に行くことにした。



・・・自分が作ったイメージが少し頭の中に残っていた私はあまり腕の力を使わずに図書館に行った。おかげで普通の倍の時間がかかったのは言うまでもない。

「こんにちは」

「こんにちは、はやてちゃん。今日も早いわね。」

図書館についた私は入り口に居た司書のおばさんに挨拶をする。毎日ここに来ているので司書のおばさんとは名前を覚えられるくらいには交流がある。

「あ、はやてちゃん貴方が借りたがっていた本ついさっき返却されたわよ」

「えー！ホンマですか。」

「ええ、さつき歴史の本がおいてある棚の向かい側の棚に置いたから今行けばまだ借りられてないかもしれないわよ？」

「わかりましたー！ありがとうございます。」

そう答えると私はすぐさま歴史コーナーの本棚に移動し始めた。図書館の中は人が少なくものすごく静かだった。まあ、平日の昼前なので当たり前なのだろうが。なので車椅子の移動するスピードを少し早くした。

私はお目当ての本がある棚のところにつくとすぐ本を探し始めた。

「え」と、あ、あった。」

本は五段ある本棚の上から二番目の棚に置いてあった。私はその本に書いてあるタイトルを呼んだ。

「断頭台の秘密……なんかちょっと怖いタイトルだな」

一週間前にこれをここで見つけた私は何故かこの本を読まなければならぬと思った。理由は分からない。ただ漠然とした直感だった。次の日に借りようと思っていたのだがタッチの差で他の人に借りられていて読むことが出来なかった。

私はその本を取ろうと車椅子の手すりに片手を置き椅子から少し浮かび手を伸ばした。本が置いてあるのは四段目、普通の人ならすぐに手に取れる高さ。でも自分は車椅子に乗っているせいでぎりぎり届くか届かない高さなのだ。

「あと、もうすこし……」

一生懸命手を伸ばす私。車椅子はその不安定な体制のせいで少しぐらぐらしていた。一度座り込んで体勢を立て直そうとしたその時横から腕が伸びてきた。その腕は目当ての本を手に取りそれを私に渡してきた。

「ほら、コレが取りたかつたんだろ？」

その言葉がした方向に私は視線を合わせた。

そこには大人のお兄さんが立っていた。顔は整っており中性的な顔立ち。青い目、青い髪、この町では取り立てて珍しくも無い髪と目。

しかし私にはその姿が、一瞬ばやけて違う姿に見えた。赤い髪、赤い目、そして黒に近い灰色の肌。

まるで人ではない、姿に。

でも、何故だろう？私は恐怖を感じなかった。

だって、私にはお兄さんの目が泣くのを必死に我慢しているように思えたから。

「あっ、ありがとうございます。」

気がつくとお兄さんの姿は最初の姿に戻っておりこっちを見ていた。私はあわててお礼を言うがお兄さんはじーっとこっちを見て言った。

「お前、車椅子に乗っているのに無茶するんだな。」

「いやあ、このくらいの高さなら取れるかなって思ってたんですけど。」

自分でも少し無茶だったかな？っと思っっている。お兄さんに言われて私は少し恥ずかしかったから笑ってごまかす。それを見たお兄さんはあきれたような顔をして離れていこうとした。

「ちょっと待ってください！！！」

気づいたら私はお兄さんを引き止めていた。このまま彼を行かせたら駄目だ。彼はこの世界で独りぼっちになってしまふ。お兄さんの後姿を見た私はすぐに理解した。

「なんだ？」

お兄さんは立ち止まり振り返った。  
立ち止まってくれたのは良いが私は何を言ってお兄さんを行かせないようにするか考えていなかった。私はとっさに言葉を口にした。

「あっ、あの、もう3冊くらい取って貰いたんですけど・・・」

自分の想像力の無さが忌々しい！！肝心な時にコレなのだから。もつと他にあるやる！！でも、その言葉を聞いたお兄さんがこっちに戻ってきたのでどうにか行かせないようにならなければならない。だが・

（・・・本でないしよう）

取ってもらった本など本当は無かったので私は少し困っていた。

「ほんとにありがとうございました」

「きにするな、これからあんな危ないことをしなければ俺も気にしない。」

「うぐっ・・・」

図書館から出てきた私はお兄さんにお礼を言ったのだがお兄さんからきつい言葉を貰ってしまった。その言葉に胸を押さえる振りをする私。

(このお兄さん絶対Sや)

私の中でお兄さんの性格が少しだけ判明した瞬間だった。

「お前も今度から本を取るときは近くの人に頼めよ」

にしてもこのお兄さんさつきからお前お前って。名前を言ってない私が悪いのは分かるが普通名前を聞かないものだろうか？

「?・・・どうした。」

いきなり黙った私を見てお兄さんが声をかけてきた。

「名前・・・」

「名前?」

「さつきからお兄さん私のことお前としか言ってないやん。私には八神はやてって言う立派な名前があるねん!!」

「・・・ああ、そいつのことか」

「それでお兄さんは?」

「え？」

お兄さんが私に聞き返してきた。いや、お兄さん人の名前を聞いたんやから自分の名前を言わなあかんやん。私は心のうちでつぶやくとお兄さんに言った。

「え？やないよ。私の名前を教えたんやからお兄さんの名前も教えてもらわな。」

お兄さんは少し考えるそぶりを見せた。なんで自分の名前を言うのに考えないといかんのやろ。私は少し気になったが、お兄さんが考えるのをやめ名前を言おうとしたので気にしないことにした。

「・・・蓮」

「蓮？」

「ああ。俺の名前は藤井蓮って言うんだ。」

その名前を聞いたとき何かが私の心にストンときれいに入ったようなきがした。ああ、その名前はこれのお兄さんに似合っている。まるでこの世界がやっと藤井蓮という存在を認識したのだと、そう思った。

「なあ、蓮さん」

私はお兄さんの名前を呼ぶ。今名前を知ったのに少し慣れなれすぎたかなと思うが今から

言おうとしている事に比べればどうと言う事も無い。

彼の姿を見たとき私直感した。この人は私と一緒に。この世界に一人ぼっちで寂しいくせにそれを我慢して一人で居ることにこだわっている。だから・・・

「なんだ、いきなり下の名前か？」

蓮さんは少し苦笑していたがまあ、そこは子供だから許してや。

私の言葉を聴いて蓮さんはなんて思うやる？変わった子やと思うやるか、気持ち悪い子やと思うやるか、出来れば前者であってほしいと思う。私自身初対面の相手にこんなことを言うのはおかしいと思うけど、言わないといけないと思ったから。

「蓮さんに聞きたいことがあるねん」

「なんだよ」

「あんなあ、蓮さん、

.....」



「・・・はあ？」

その時の蓮さんの顔を私は忘れないだろう。  
クールそうな顔が一瞬固まったのだから。

異世界転移（裏）（後書き）

三話目書くとかいいながら視点変更の二話を書く俺はなんてすばら  
イタっ！！

すいません石投げないで！！

とりあえず原作ヒロインが出たから視点変更も書いたほうがいいか  
など思ったんです！！マジすいません。

1、フラグ立った！！恋愛フラグじゃないなんかのフラグが立った  
！！

2、筋肉モリモリ少女

3、一人で寂しそうな同類めっけ。

以上三本でした。

それといつの間にかお気に入り百人超えてました本当にありがと  
うございました。読者の為にこの小説を完結できるように頑張っ  
て行きます。

感想その他ご意見をお待ちしています。

P・S

お気に入り100名を突破したので目覚まし時計を作成中。  
アラーム音は

「滅人滅相おおおお!!」

「又キ又キポン」

この二つです。

修正しました。

## FAKE FAMILY (前書き)

俺はシリアスよりシリアルのほうがしようちに合ってるな。

シリアス難しい。どうしてもギャグっぽいことを挟んでしまつ。  
タグにキャラ崩壊を入れるべきか・・・

## FAKE FAMILY

今でも覚えている、自分が殺し合いの世界に入って行った時を。

何時までも続くと思っていた日常があっけなく壊され、殺し殺されの世界に引き釣りこまれたことを。

あの時ほど自分が困惑していたことも無かっただろう。

だが俺はあの時以上に今の状況に困惑をしていた。

それは・・・

「ほら蓮さん、そんな所でぼーっとせんで早くこっちにきてご飯の準備手伝ってな。」

「あ、ああ」

「その棚にお皿があるからそれにこのサラダをついでくれん？」

「……………」

「あっ！！そのまえにテーブルを布きんでふいとってな。」

「……………はい」

……………何で俺は初対面の子供の家で夕食の手伝いをしてるんだよ。

「いつもは一人分しか作らんからたいしたもん作らないんやけど、今日は蓮さんがあるから腕によりをかけて作ってみたんや。」

はやてはそう言うのと俺の腕をひばって椅子に座らせた。

テーブルにはいろんな料理が並べられていた。スパゲッティ、トマトサラダ、ハンバーグ、コンソープ、カレー、そして、ご飯。あきらかに多すぎるだろうっと言うツツコミを飲み干し俺は再度はやてに視線を合わせると、ニコニコした顔でこっちを見ていた。それはあれか？早く食べてくれと言う遠まわしの脅しか？

俺はため息をつくと箸を取り、並べられている料理の一品から一つ取り口に含んだ。

(……………本当にどうしてこうなった？)

「あんなあ、蓮さん。私の家族にならん？」

それが俺が名乗ったあとの八神はやての言葉だった。

「……はあ？」

俺は意味がわからず再度聞き返すように答えた。

「すまん。何が言いたいのかわからないがとりあえず言っておく。俺はお前のようなチンチクリンの餓鬼に興味がない」

「なっ！！チンチクリンってそれはあまりにも酷いやないか！！」

「事実だろ。」

「くっ……た、確かに今はこんなやけど十年くらいたったら胸がバインバインなニスバディーになっとるわ！！」

「…ハッ！！」

「鼻で笑われた！？」

八神は悔しいのか車椅子の手すりに手をドンドン叩きつけていた。

「…って、その家族やない！！例えて言うなら兄と妹みたいな関係にならんかって聞いてんのや。」

「そっちの方が意味わかんねーよ。何で今日あつたばかりで見ず知らずの男に家族にならないか聞いてくんだよ。」

「そ、それは…」

「それは、なんなんだ？」

八神は顔をうつむきちいさな声で答えた。

「蓮さんが泣くのを我慢してるように見えたから…」

「……」

その言葉に一瞬俺は言葉を失った。

「私なあ、物心ついたときから両親がおらんねん。今まで一人で生活してきたけど、やっぱり寂しかったんやと思う。そのせいやるか、寂しそうな人がおっいたらなんか雰囲気でわかるようになってたんや」

「……」

「はじめ蓮さんを見たときにな何か寂しそうな人なって思ってたん、けど本を取ってくれるときの蓮さんの横顔を見てたら思ったんや、この人は何か悲しいことあったのにそれを必死に我慢してる、泣かない様にしてるって」

俺は静かにはやての声に耳を傾けていた。正直な話八神の話は間違っていない、自分だけが生き残り違う世界に来てしまった。俺を蘇らせる為に消えていった仲間達、司郎、戎、櫻井、アンナ、リザさん、ミハエル、先輩。もしかしたら彼らも自分のようにこっちの世界に来てるんじゃないかそう考えてたこともある。だがこの町の中をいくら探しても彼らの姿を見つけることが出来なかった。

一人でいることに涙を流しそうになった。けどもしかしたらこの町以外のどこかにいるかもしれない、そう思い涙をこらえていた。その事に八神は気づいたのかもしれない。

「それで気づいたんや。この人を一人にしたらあかん、一人にしたらそのままたった一人のまま死んでしまうって。」



「…だとしても赤の他人だろ？ほっとけばいい。」

「せやね、確かにそうかもしれん。…けど私にはそんなことできん、見過ごすことができんかったんや。」

「どうして？」

「さっき言ったやん、『私も寂しかったんや』って。私と蓮さんは似てる、どういった経緯でそうなったかはわからんけどそれだけはわかるんや。」

「だから家族になろう…か？」

「そつや。」

八神は真っ直ぐこちらを見ている。まるでこれが私の伝えたいことだといわんばかりに。

ああ、それはたしかに俺が望んでいたことだ、あの黄昏の中で変わらないと信じていた刹那。どんなに欲してももう取り戻せないかけがえないもの。それを取り戻せるなら俺は何でもしただろう。だけど、…

「…八神それは傷の舐め合いだ、けして褒められる事じゃない」

「…っ。」

俺は八神を突き放すように言葉をかけた。

「なんで…、なんでな蓮さん、蓮さんは寂しくないの？なんでそんな生き方しかできんの…。」

寂しいに決まってる。でも俺だけが、あいつらをおいて俺だけが幸せになる。そんなことを俺が許せるわけがないだろ。

「なにを言っても、それが俺の答えだ。……………じゃあな」

俺はそう言つと図書館から出て行くつとして歩き出した。

（こんなやさしい子がいるんだ、この世界はあの世界よりいい所みたいだな）

そう思いながら出口から出ようとした。

だが出口に着く前で不意に誰かに腕を引っ張られた。俺は歩みを止め引つ張られてる方向を見た。

「……………」

八神が顔を俯かせ俺の腕を引っ張っていた。

「八神……………」

「……………」

「八神手を放してくれ。」

「……………」

「……………。八神手を「もう夜や」何？」

八神は急に顔を上げると俺の言葉に言葉かぶせて言った。上げられ

た顔は泣いていたのか目が少し赤くなっていた。

「もう夜になってもうたから、私は帰らんといかん！！けど外は真っ暗で何も見えん！！こんな真っ暗やと危険がいっぱいやね！！そうやる蓮さん！！」

「え、あ、ああ、そう…だな」

息もつかせぬ八神の言葉のおうしゅうに俺は少し戸惑っていた。たしかに外は暗くなっており子供が一人で出歩くのは危ないだろう。

「せやから、蓮さん！！私を家まで送っていかんかい！！」

「いやまで、何でいきなりそうなる。…と言うか何か口調変わったぞ。」

「そんな事はどうでもええねん！！おばちゃん！！おばちゃんもそう思つとるやる！！」

八神が声をかけた方向を見るとそこには司書が作業をする机がありそして机からこつちを除き見てる女性がいた。覗き見てることがばれたとわかると女性は立ち上がった。…なにしてんだあんた？

「そうね、こんな時間帯だし子供が一人で夜道を帰るのは危険だと思っわよ。」

「…ならあんたが送っていけばいいだろ。」

「そうしたいけどまだ仕事が終わらないのよ。だからあなたが変わりにはやてちゃんを送ってもらえないかしら。」

「いや、なんで俺だよ、他にも図書館に人が「あら？電話が鳴ってるわ、いそいで取りに行かなきゃ」おい！！」

司書の女性はそういうと奥の方に走って行った。

俺は走って行った女性が奥に消えるのを見た後、顔を横に向けいるであろう存在に目をあわせた。

「……」

「……（にこにこ）」

「…俺に送って行けっか？」

「（コクコク）」

八神家に行くことが決まった瞬間だった。

いやまで、俺がやることは家まで八神を送って行くことだけだった  
だろ！！なんで夕食の手伝いして飯食ってんだよ！！俺はそれに気  
づくとならば隣で食べ終わった食器を洗っている八神に声をかけた。

「八神」

「ん〜。どうしたん蓮さん？もしかしてご飯がおいしくなかった？」

「あ、いや別に飯は普通に美味しかったぞ」

「ほんま!!!よかつた〜、他の人に食べてもらうことなんてなかったから少し心配やつたんや。」

「そうか。」

八神は俺にほめられたことが嬉しかったのか、ニコニコしながら皿洗いを再開した。俺はそれを見てこっちも洗った皿を拭く作業を再開…

「まてこら」

「ふみゆ!?!」

「何で俺はお前の家に入りこんでんだよ。ああ!?!」

俺はそう言いながら八神の頬を上、下、横に引っ張った。

「ひよっ、ひよれはひえまでほふってふれたお礼で夕食を〜馳走したんや」

頬から手を離すと八神は頬を押さえながら答えた。頬は赤くなり少し腫れていた。

俺は一息ため息を吐いた。

「ならお礼はもう終わっただろ。俺は帰る。」

「ちよっ、ちよっと待って蓮さんまだお礼は終わつとらんよ!?!」

「家まで送るだけでここまでしてくれたんだ、もう十分だ。」

「いや、私の気が治まんねん！！だから今日は一晩泊まっていてや。ほら時計も十時をさしてるし！！」

「ことわる、これ以上いたらまた何か言ってきて足止めするだろ。」

俺は玄関に向かおうとするが八神が両手で腕を引っ張るせいで少しづつしか動けなかった。

「そんなことないて！！何も言わんから今日は泊まってーな！！」

「しっけー！！」

俺は八神の手から逃れるために力を入れようとするが…

「お願いや…一人は寂しいんや…」

「……」

八神の今にも泣きそうな声が聞こえた。顔を後ろに向けると八神は目から一粒の涙を流しながら両腕を必死に抑えていた。腕から伝わる手の感覚も震えており少し力を入れればすぐに手が外れるほどだった。俺は腕に入れようとしていた力をなくし歩みも止めた。

「……」

「……」

お互いに正面を向き相對する。八神は上目ずかいでこっちを見てい

た。身長之差からそうなるのは当たり前なのだが。顔はまだ少し泣いているようだった。

「…明日の朝には出て行く」

「え？」

「泊まってやるって言ってんだよ。」

そう言うと八神の顔はみるみるうちに笑顔に変わっていった。

「それなら今すぐ布団をださんといかんね!!」

八神は車椅子を動かし廊下に出て行った。後姿からも嬉しいという気配がかなり漏れ出していたのがわかった。

「…まったく俺も甘いな」

子供の泣き顔一つでこの有様。司郎が今の俺を見たら腹抱えて笑うだろうな。

「蓮さん!! 布団を出すの手伝って」

「今行く」

奥の部屋から聞こえる八神の声に返事をしながら俺は奥の部屋に向かった。そのとき、俺は自分でも気づかないうちに微笑を浮かべていた。

## FAKE FAMILY (後書き)

蓮炭幼女を泣かすなんて最低!!!とアホな事を一つ。

戦闘のせの字も出ない、いつたい何時になつたら無双が出来るのか・

・

正直な話今やってる話はプロローグみたいな感じなんですよね。

そのせいか原作キャラがいまだに一人・・・原作主人公の魔王様はどこ行つたー!!

今日はこのくらいで終わります。

感想、意見待っております。



予想がいな事は突然起きる(前書き)

久しぶりの投稿

クロスってやっぱ難しいな。

## 予想がいな事は突然起きる

気がつくと蓮は暗い空間にたたずんでいた。周りには何もなくて、ただ暗い闇が広がっている。

「またこれか…」

この光景に覚えがあり幾度も見てきていた蓮は自嘲気味につぶやいた。

しばらく経つと蓮の前に映画のスクリーンのようなものが現れた。初めはテレビの砂嵐のように何も映っていなかったスクリーンは時間が経つにつれて徐々に何かを投影し始めた。

最初に映し出されたのは夕焼けが美しく見える砂浜だった。

砂浜の映像に続き次の映像が流れる。学校での生活、馬鹿騒ぎをしている司郎、香澄の部活風景、屋上で一緒に昼食を食べる先輩、教会の掃除をしているリザさん。まるで静止画のように一枚一枚ゆっくりと映し出されていく。

この映像は蓮の記憶、忘れられない過去であり、最も愛した光景。変わらない日常と思い何時までも続くと信じていた刹那。

「……………」

そして彼女の映像が流れる。蓮はその映像が流れるのを涙をこらえながら見ていた。

映像の中の彼女は笑顔を絶やささない。見ている人に暖かさをくれる

そんな顔をしていた。

触れば首を刎ねてしまう 愛し愛されることができない。そんな呪いのせいで彼女は誰にも触れることもなく触れられることも無かった。だから彼女は願う。来世の果てにある希望を それはずっと 遍く総てに降りそそぐべき光だと信じて。生まれていく命たちを 永久に見守ろう。

#### 私がみんなを抱き締める

生まれいづる者をすべて抱きしめよう。一人で寂しい思いをさせないために、私のような悲しみを知ってほしくないから。だから願う、誰をも受け入れよう、みんながけして悲しまないように。

流出した彼女の世界、蓮が守ろうとしていた黄昏の世界。その世界では等しくみな幸福に包まれていた。あの既知や修羅もその世界を心地よく思っていたのだろう。

だがその世界にはそれが気に食わない奴がいた。

映像が変わる。彼女を写していた映像はいきなりすべてが黒く塗りつぶされていった。

そして黒に塗りつぶされた映像の中で最初に出てきたのはキラキラと光る三つの赤い目だった。

そいつは突然現れた。

#### 第六天波旬

女神を殺し、蓮からすべてを奪った敵である。

独りになりたい。俺の身体は俺だけのもの。俺は唯一無二のものそ

れが波旬の渴望。程度の差はあれ、そうした思いは誰であれ持つものだろう。しかし波旬は神域へと上がれる資格を有した存在で、そんな彼が畸形を持って生まれたという二つの事実が、彼をして最強の邪神へと変貌させた。

女神による抱擁も、彼にとっては汚らわしく鬱陶しいものでしかなかった。なぜなら波旬は他人を知らない。知ろうとも思わない。ゆえに抱きしめるといふ行為も、母性の意味も分からなかったのだ。

そして戦いが始まった。

蓮はその戦いの映像を見る。自分が負けた、守れなかった、三人も覇道神がいてたつた一人に打ち勝つことができなかった、その現実を受け入れるために。

戦いの映像が流れるたびに蓮の心が怒りに満ちてくる。ゆるさない、こいつだけは、女神を汚したこいつだけは！！・・・それが本来蓮が持っていた憎しみだった。だが、

「……」

今の蓮は黙って映像を見ていた。

あいつらならきつとこいつを倒してくれると信じているから

次代を担うものたち、彼らが自分の代わりにあの世界を終わらせてくれる。そう確信していたから蓮は安らかな思いだった。

蓮は視線を映像から離すと後ろを向く。あの映像が流れたと言うことはこの空間も終わる。それが今までこの空間に来たときの流れだ

った。蓮は映像を背に歩き出した。

「…っ!？」

蓮は後ろから感じる視線に足を止めた。自分は知らない。こんなことは一度も無かった。蓮は後ろを振り向いた。

そこにはさっきまで戦いの映像を流していたスクリーンが黒く塗りつぶされた状態であった。

「…」

蓮はスクリーンに近づいていく。この自分のうちから来る不安を解消するために。スクリーンに近づいた蓮は右手をスクリーンに触れさせた。

「…」

「……気のせいかな」

蓮は手を離すと先ほどのようにスクリーンを背に歩き出し、離れていった。

「……だれだ？……おまえ……」

「!?!」

蓮はその声にあわてて後ろを振り向きつつするがその前にこの空間から放り出された。

「…ああっ!!」

俺は勢いよく上半身を起こした。

「はあ、はあ、…夢…夢…か?」

俺は顔を手で覆う。気が付くと顔は、異様に汗をかいていた。

「…くっ。はは、無様だ。未だにあのときの夢を見るなんて。…い

つまで引つ張ってんだよ俺は」

手を顔から離すと周りを見る。そこは昨日ご飯を食べた部屋。その部屋に置いてあるソファーに蓮は寝ていたのだ。

「…朝か。…ん？」

不意に俺は下半身に重みを感じた。俺は下半身に視線を向ける。だが、乗ってるのは布団が一枚だけだった。俺はその布団をとり布団の中を確認した。すると…

「すーすー」

「……」

はやてが俺の体をホールドしながら寝ていた。…こいつ、何時の間にか…

「おい、はやてなんでお前ここで寝てんだよ。」

体をゆするが全然起きる気配がない。俺は再度体をゆすった。

「ん…なんや、蓮さんおはよう」

はやては目をこすりながらこっちに視線を向けた。まだ寝ぼけてるようだった。

「おはようじゃねーよ。なんでここにいるんだよ？」

「…え、ここって私の部屋やろ？…ってなんで蓮さんここにおんね



ん？まさか！！私の部屋に夜這い！！い、いやさすがにそれは問題が……」

「……」

「蓮さんがそんな趣味やたなんて……。私としては別に問題は……」

「誰もおまえみたいなチンチクリンに手なんかださねーよ」

「またまた、私の部屋に来てるのにそんな言い訳はバカらしいで。れ、ん、た、ん」

……ぶつち……！！

俺ははやてを体から引き剥がし向かい側のソファーに投げつけていた。

……いまわかった、こいつ香純と一緒にアホだ。

「あたた。……いきなり放り投げるやなんて何考えてんねん。あゝ鼻が痛い」

「うるさい、勘違いしたおまえが悪い。俺は悪くない」

はやてはソファーの上で自分の鼻を手でさすりながらこっちに批判の眼を向けていた。俺はため息を一つ吐くと向かい側のソファーに座った。

「それで、なんで俺が寝てるソファと一緒に寝てたんだ？」

「いや、蓮さんを起こしにきたんやけど、あまりにも気持ちよさそうに寝てたからつい……」

「つい、で男の布団の中にはいるなアホ」

まったくこの餓鬼は一体何考えてる？

「それより蓮さん。そろそろ朝食作りたいんやけど、車椅子を持ってきてくれへん？」

その言葉に俺は車椅子を探す。車椅子はさっきのドタバタの所為かテーブル近くまで移動していた。俺は車椅子を取りにテーブルに移動した。……だが俺はその時気が付かなかった、後ろではやてがニヤリと笑っていたことを。

俺は車椅子の後ろに回ると車椅子をはやての近くに持っていくためにハンドルを握り押そうとした。が…

ギシッ！！バキッ！！コロコロコロ……

「…ああ!?!」

俺は変な音がした車椅子に視線を向けると、車椅子はタイヤが外れソファに転がっていき、そのタイヤを取り付けていた部品は変な形に変形していた。俺はハンドルから手を離しはやての方を見た。

「…」

「（ニクニク）」

はやてはニコニコとした顔をこちらに向けていた。

「…これは、俺の所為なのか？」

「もちろん。弁償やで。」

俺は目の前が真っ暗になった。

## 予想がいな事は突然起きる（後書き）

・ 無理やり完が否めない、蓮を引き止める理由が思いつかなかった・

車椅子が壊れたのははやての所為です。はやてが仕掛けをしてました。ですが予定ではアンナに壊れる予定ではなかった。蓮炭の化物パワーの所為。

あれ、結局蓮炭の所為？

そして、フラグ立ててみました。助けてー！！めちゅじんめっちようがはじまるよー！！

## 無印予告（前書き）

間がさした。後悔してる

## 無印予告

あの人の出会いは突然だった

「今日からうちで働くことになった藤井君だ。」

「藤井蓮です、よろしく。」

私はあの人が少し苦手でした。

「お前、そんな笑い方してて辛くないのか？」

「えっ……」

あの人は私の心をかき乱す。

「子供がこんな危ないことする事がおかしいんだよ。」

「でも、これは私にしかできないことなんです!」

私のかぶっている仮面を盗ろうとする。

「お前に何があったのか知らない。でもな、それを知ったから家族が離れていくななんてお前が勝手に決め付けんな。」

「…本当？もう我慢しなくていいの？」

最初に彼と出会った時は敵同士でした。

「それを渡してください。」

「子供がそんな危ないものを振り回すなんて、世も末だな」

私が危ないとき彼は助けてくれた。

「…止まって、お願い、止まって!?!」

「馬鹿野郎!!手を離せ!!」

彼は私に教えてくれた。

「自分のことを決めるのは自分自身だ。他人が決めた自分の評価なんて気にするな。お前は自分がありたいと思ったものになればいい」

「私は…」

気に入らない。

こいつらは、自分のことを考えていない。考えているのは自分以外の他人、そして家族。

「わたしは良い子じゃないといけないんです!!」

「それが母さんの頼みだから。」



わけのわからないやつらが出てきやがる

「止まれ！！お前からロストギアの反応が出ている！！！」

「…はあ？」

知っている奴の幻影を見ているようだった。

「取り戻すの！！こんなはずじゃなかった世界を！！！」

「死んだものは蘇らない。もし蘇ったとしてもそれは本人じゃない、別人だ。」

「私はいつも気づくのが遅すぎる…」

「遅いと気づいたのならすぐ行動しろ、お前とあいつはまだ生きてるんだ。」

.....  
生きてる限り遅すぎるなんてことはない」

これはある一つの御話。2人の悲しい女の子が救われるifの話

「お願い!!母さんを助けて!!」

「それでも昔は神様だったんだ、助けてやるお前の大切な家族を。」

魔法少女と黄昏の守護者（無印） 始まります。

「時よ止まれ、お前は美しい」

「もしかしたらこの刹那を守るために俺はこの世界にやってきたのかもな」

無印予告（後書き）

わるぎは無かった。

と言いか予告なのに予告べしりにならないかも・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9829y/>

---

魔法少女と黄昏の守護者

2012年1月13日00時46分発行